

普段は気づけないこと

(原文)

池田 保美 (14 歳)

東京都

東京学芸大学附属国際中等教育学校

私は小学校を卒業するまで韓国に住んでいた。ある日、私が通っていた小学校に DMZ (非武装地帯) の自然を広める活動をしている団体の方が訪れ、私たちはその生態系に関する話を聞いた。講義が終わる前に、団体のブログに感想を残してくれた数々の学校のうち一組を選んで DMZ で現場学習をさせてくれるという話を聞いて私を含め六年一組はみんなでブログに講義の感想を書いた文章を載せた。それが選ばれ、私たちは DMZ に行くことになった。DMZ は韓国と北朝鮮を分ける軍事境界線を中心として南北に 2km 程度ある非武装地帯のことを意味する。実際いけるのは DMZ の手前の民間人統制区域だが、様々なことが学べる観光地としての施設が整っている。DMZ は誰も入れない地域であるからこそ 70 年近く DMZ の自然は人の手は加わることなく放置されてきた。その間生物たちは自分たちの世界を広げて生態系を作り上げてきた。私が実際行ったとき見かけた文句も「平和と生命の地 DMZ」だった。先生は色々な意味を込めて価値がある地だということを教えてくださった。望遠鏡で珍しい生物たちを見て、分断の現実を間近で見え感じ、おいしい豆を使った料理もいただいた。きれいな水、空気のおかげでおいしい豆が育つらしい。冬だったので寒かったが数十個にもなる風車が立ち並ぶ公園で写真も撮って、とても楽しかった記憶がある。

だが、今考えると悲しい気持ちになってくる。休戦中であるからこそ存在する空間だからという点もあるが、自然豊かな生態系を作り上げることができたということは絶滅危惧種、天然記念物、渡り鳥など人間によって姿を消していった動物たちが、人間がいなくなった所で自由に暮らしている。ということにもなるだろう。人間は今まで自然を多く活用し発展してきた。そして自然が、自分たちが危機に陥るまでその大切さは強く感じられなかったから新たな問題に直面しているのかもしれない。うまく付き合えばいつまでも優しい大自然であるはずなのに、残念なことだと思う。

授業やテレビ、普段の生活で自然について学ぶたびに「自然ってよくできてるな」と思う。弱肉強食の基本的なルールとその中で存在する共生と寄生の世界、何か起きたとき、もしそれが何十年も時間をかけたものだとしても必ず生物のバランスが元通りに戻るそのシステム、生きるための生存力、周りに合わせ自分が進化していく適応力など。今、私たちが学べることも少なくないだろう。世界的にも有名な絵本で『大きな木』という絵本がある。シンプルだがとても深い内容で、何より自然の恵みについて考えさせる。私たちは果たして誰かにいつまでも与え続けることができるだろうか。陰な

がらいつも支えてくれる、両親にも思えてくる。人間は自然の一部だから自然は親という考え方もありえるかもしれない。両親のような存在としてみるなら私たちが母の日、父の日に日頃の感謝の気持ちを伝えるように、自然にも感謝の気持ちを伝えるきかいがあってもおかしくないと思う。

感謝を伝える一種の方法として、「もっと知る」ことも含まれるのではないかと思った。なんでも興味を持たないとやろうと思わないので、どんな自然に関する活動だとしてもある程度の知識をもとに実行した方がその活動においての意味も深まり、自分の満足度も上がるのではないか。自然を学ぶ機会が少ないわけではないと思う。一つ一つに気を配り意味を考えていったらそう遠くない生活の中に、意外と身近なところに自然を感じ、学べる要素はある。だから私は自然の素晴らしさについてもっと知りたい。これからも、いつでも心広く受け止めてくれる自然の偉大さを感じながら、自然と共に生活していきたい。